あの頃

松橋　健一

三月十七日、夜中の十一時過ぎ、電話が鳴った。お袋からだった。病院がすぐ来てくれとのこと。タクシー会社に配車の手配。水を飲み、顔を洗い、酔いを覚ます。昼間、見舞いに行った時には、かなり弱っているのがわかった。（長くはないかな　）そう思った。タクシーの運転手に土手沿いに、川崎病院まで急いでくれと頼む。車が少ないので、いつもより早く着いた。酸素マスクをつけて横になっている親父。しばらくして姉貴夫婦が到着。ほぼ同時に、当直の医師がやってきた。ペンライトで瞳孔を確認している。

「ご臨終です。三月十八日、〇時十五分です」

まるで、ドラマのワンシーンのようだった。感情のない声で、親父の七十八年近い生涯が終りを告げられた。

いつの頃からだろう。現実から逃避する癖がついたのは。なにか嫌なことがあったり、悲しい事が起きた時に、頭の中で楽しいことを空想して、なるべく現実を忘れるようにしていた。だからと言って、現実が変わるわけではないのだが。今では、夢ではなくて酒になった。どちらにしても、現実逃避だ。いくら歳を重ねても、ダメな奴はダメなんだな。

何事も、正面から対峙するのが怖かった。現実を素直に受け止められなかった。何かと言うと泣いていた。そんな子ども時代だった。最初に覚えている記憶はなんだろう。いくつか思い出すことがある。ただ、時間も順序も全くわからない。なんとなく断片が記憶の片隅に残っているだけだ。

鉄橋の上で、夕陽を見ている。自分ひとりじゃない。確かに誰かいる。二人かな。鉄橋の下には貨物線が通っている。線路がいくつも並んでいる。その夕陽はかなり大きく感じられる。現実にあったことなのだろうか。わからない。親にも聞いたことがない。ただ鮮明に記憶の中に残っている。

小学校（だと思う）の校庭にいる。花壇がある。そこに座っている。芝をむしっては投げ、むしっては投げ遊んでいる。明らかに鉄橋の記憶より前だ。いくつぐらいなのだろう。しばらくすると、女性に抱えられて喜んでいる。母親ではない。誰だろう。他に誰かいるのかまではわからない。それだけの記憶。

薄暗い部屋の中に、家族四人と誰かがいる。鉄橋の記憶とどちらが先なのだろう。親父が何か持って怒っている。持ってと言うより振り上げている感じだ。ただこれだけ。全く状況がわからないのだが、ハッキリと覚えている。

またある時、何故か子どもの集団の中にいる。かなり小さい。ただ、母親たちの姿は見えない。健一ひとりが泣いている。まわりの子どもたちは、楽しそうに遊んでいる。何をしているのかは、わからない。ただ、自分一人が泣いている。こんな記憶もある。

どの記憶も、現実の事かどうかは、今となっては確かめようがない。親にいろいろと話しを聞かされて、そんな記憶になったのか。あるいは写真か何かで見た光景を自分の記憶にしているのか。現実であろうがなかろうが、何故か記憶には残っている。

昭和三十八年四月十六日、松橋健一は福島県常磐市（いまのいわき市）に、父健吾、母芳枝の間に、長男として産まれた。ただ、長男と言っても二人姉弟の下なので、まったく長男らしいところはなかった。父親の仕事の都合で、常磐炭鉱の閉山間近、一家は人手を求めて移り住んでいた。父親はホンコンフラワー（造花）の制作業をしていたので、炭鉱の女手をあてにして内職の人手を探していたのだ。もちろん、健一にはそんな頃の記憶があるわけはない。ところが何故だか、健一が産まれると父親は造花業をさっさと廃業し、首都圏の川崎市に移り住んでいる。健一が産まれて、まだ四か月目だった。何故、健吾は廃業を決意し、川崎市へ移り住むことにしたのだろう。結局その理由は、聞かないまま、親父はあの世に旅立ってしまった。お袋に聞けばいいのだろうが、何故だかお袋には聞けずにいる。

当然、健一には、常磐市の記憶など微塵もない。健一の記憶にある光景は、川崎市に移り住んできてからのものだ。

健一の家は、貧しかった。父親は、川崎市に来てからは、なんとか公務員の仮採用で職にありついていた。だが、常磐市から引っ越してきた時の荷物は、行李がふたつと布団だけだった。タンスもなにもない。六畳一間のアパートに一家四人で移り住んだのだ。健一には四歳年上の姉がおり、美恵子と言った。当然ながら、健一にはその頃の記憶はない。美恵子は東京で産まれた。常磐市に行く前に住んでいた上井草で。その美恵子は、常磐市に引っ越したその日から、うちへ帰ろうと泣いていたらしい。東京から移り住んだ、四歳の子どもには、炭鉱の街、常磐市はどういう風に映ったのだろう。

昭和三十八年と言えば、翌年に東京オリンピックを控え、社会が激動していた時代である。新幹線、高速道路、高層ビルなどの建設ラッシュ。高度経済成長の真っただ中。しかし、川崎の貧しい一家は、そのような社会情勢とは、一切関係のない暮らしをしていた。と言うよりも、松橋家だけではなく、川崎のような街では、オリンピック景気など、あまり関係がなかった。オリンピック景気に便乗して一旗挙げようと、東京に出てきた労働者が、あぶれて川崎のような街に集まってきたのだ。

最初に住んだアパートの大家は、Sさんと言ったはずだ。ここには、健一が幼稚園に上がる前頃までしか住んでいなかった。そこは木造の二階建てで、そこの二階に住んでいた。かすかな記憶だが、そこの階段から転げ落ちたという記憶がある。痛かったとか、怪我をしたとかの記憶はない。また転げている時の感覚も全く覚えていない。後から親に言われて、そうだったと思っているのかも知れない。

松橋家では、親父が毎週末、その週の給金をもらってきた。その中から必要なだけを出して、残りは鴨居のところに挟んでおいた。それが全財産である。そして月末に貯まった金で、家賃を払うという繰り返しだった。川崎に来たばかりの頃は、鴨居の金は家賃で、すべて消えていった。貯金などの余裕はなかった。食べることにやっとだった。

近所には、なおき君という同い年の子がいたことは覚えている。だが、いつの間にか引っ越してしまって、その後はどうなのか、これもわからない。よく遊んだと思うのだが、何をしたとか、何があったとかは、あまり思い出せないでいる。子どもの事だから、隣町に引っ越しただけでも、今生の別れになっていたのだろう。

また、じろうと言う名前にも記憶がある。君をつけていなかったのだから、おそらく健一より年下だったのではないだろうか。いくつだったのかもわからない。名前だけ覚えている。同じアパートだったはず、いや違うのか。

この頃、川崎では工場による公害がひどく、空から煤煙が降っていたと言う。今では工場が埋立地に移転し、エントツの排気規制も厳しくなり、考えられないが、健一が小学校に上がるくらいまでは、確かに煤煙は降っていた。シーツなどを干すと、黒い斑点模様がついてしまった。その頃は、まだ街中にバラ線に囲まれた空き地が多く、建設資材などが

放置されていた。多くは子どもたちの、遊び場になっていた。公園などよりも楽しかったのだろう。そんな小さな頃に、そのような場所で遊んでいたのかと思うと、今では考えられない。親もあまり深く考えていなかったのだろう。まったく呑気な時代だった。

小学校に上がる前なのだから、行動範囲は狭かったに違いない。いつも、どこで遊んでいたのだろう。誰と？　なおき君か。顔は浮かばない。女の子も近所にいた。確か、ひろこちゃんだったと思う。記憶は曖昧だ。ひとつだけ覚えていることがある。健一は、「キャプテン・ウルトラ」が好きだった。いつも主役をやっていた。いや、主役をやったことだけを覚えているのかもしれない。その中に、ハックというロボットが出てきた。なおき君が、いつもハックをやっていた。ロボットの真似が上手かった。

この頃は、四つ違いの姉の美恵子は、何をしていたのか。覚えてはいないが、外で一緒に遊んだ記憶がないから、幼稚園か小学校にでも通っていたのだろう。覚えていないのも無理もないか。

その頃、一番嬉しかった想い出は、母芳枝に連れられて、市電に乗って川崎駅前まで行き、デパートに行くことだった。当時の岡田屋の屋上には、小さな遊園地があった。今見たら、恐ろしく粗末なものかもしれない。乗り物にはあまり乗せてもらえなかったが、その場にいるだけで、嬉しかった。たまにアイスクリームなど買ってもらった。とても美味しく、食べるのが惜しいくらいだった。年に何回あるかわからないくらいだったが。

まだ、トロリーバスが走っていて、健一は乗りたくて仕方がなかった。だが、トロリーバスの路線は、健一の家とは関係がない方角だった。それでも乗りたくて、駅から、停留所を二つだけ乗せてもらった記憶がある。今のように交通が整備されていなくて、トロリーバス、市電、バスと混在していた。トロリーバスは、早くになくなってしまった。幼稚園に行く頃にはなかったはずだ。

みんな貧しかった。日本中が貧しかったのだろう。ただ、皆が貧しいから、貧しいとは感じなかった。ましてや小さな子どもである。そんなことは考えもしなかった。松橋家も、相変わらず貧しかった。

Ｓさんのアパートには何年いたのだろう。引越しの記憶など全くないのだが、幼稚園に

は、引っ越した先の、Tさんのアパートから通った気がする。いつ引っ越したのかもわからない。じろうはどうしてしまったのだろう。

荷物も少ないから、簡単な引っ越しだったと思うが。このあたりが良くわからない。思い出せないでいる。

引っ越した先の、目の前に名前は思い出せないのだが、二つくらい年上の子どもがいた。何かにつけて、いじめられていた記憶がある。やはりよく泣いていた。この頃から幼稚園に通いだしたのではないだろうか。健一は、一年間しか幼稚園に行っていない。小学校の附属の幼稚園だった。結構な倍率で、抽選を行った。公立だったから安かったのだろう。

担任の先生は、高橋先生と言った。ひばり組だった。これはしっかりと覚えている。幼稚園は、全部で三クラスあった。担任の高橋先生はとても優しかったと記憶している。

幼稚園の頃は、泣き虫なくせにやんちゃだった。弁当も小学校の前のパン屋で、小さな菓子パンを一つ買ってもらい、とにかく早く食べ終わって、園庭に遊びに飛び出したかった。だから、まとも弁当など、ほとんど持って行かなかった。そんな仲間が、二～三人いたと思う。ひとりだけ名前を覚えている。かたぎり君と言った。かたぎり君の家は幼稚園から遠かったと記憶している。健一のうちからは、子どもの足でも、十分とかからなかった。

基本的に粗野な性格なものだから、思いとは反対に、女の子を泣かせてしまったりした。そんな時、泣き虫の健一は自分が泣きたくなってしまった。何度そんなことがあっただろうか。

そう言えば、思い出した。ひろこちゃんも同じ幼稚園だったような気がする。確かクラスは違ったが、同じだったはずだ。幼稚園などでは、クラスが違うと別世界だった。他のクラスの先生の事は、全く覚えていない。と言っても、実は高橋先生のこともそれほど覚えているわけではないのだが。

この頃、毎日何をしていたのだろう。健一は、小さい頃から絵を描くのが好きだった。姉の美恵子と向き合って、坊ちゃん刈りの健一が、絵を描いているモノクロ写真が残っている。あとは、ほとんど写真がない。まだその頃は、モノクロ写真も高価なものだった。数枚残っている写真を見ても、その当時の事は思い出せないでいる。

自分の産まれた病院に行ってみたくなった。今でもあるのだろうか。母子手帳を見れば、

名前はわかるはずだ。ただ、なんとなくお袋に言えないでいる。

親父の葬儀も終わり、四十九日を前にして、ひと段落している。四十九日や納骨の件で、お袋には最近よく会っている。今度訪ねる時に、見せてもらおう。何だかわからないが、今までは、見てはいけないような気がしていた。親父の供養だと思い調べてみるか。果たしてお袋に言いだせるだろうか。

何故、親父が、川崎に移り住むことにしたのか、今になって無性に知りたくなった。二〇一一年三月十一日の震災で、いわき市もかなりの被害をこうむった。福島原発の放射能汚染による風評被害もひどかった。そんな中で、どうしてもいわきに行きたいと思うようになっていった。

今思えば、この話を書きだした頃には、親父の病気はだいぶ進んでいたのだろう。通院は続けていたが、それほどひどい状態とは思えなかった。それが、救急車で搬送されて、まさか二ヶ月足らずで亡くなるとは。病院のメディカルソーシャルワーカーとの面談でも、はっきりしたことは言われなかった。書き始めていたこの話も、大きく書きなおさなくてはならなくなった。初めにはなかった、なにか違う感情が湧いてきたのである。ただ、病院への不信感は強くなった。

入院中、健一は娘の麻友を連れて、何度も見舞いに行った。麻友が行くと親父は手を握って、何か話していた。いや、まともに話せてはいなかったのかもしれない。

二ヶ月の間、親父はだんだん弱っていく姿を見せて、家族に心の準備をさせてくれたのだろう。亡くなった時には、特別な感情は沸き起こらなかった。不思議な感覚だった。

親父には、よくキャッチボールをしてもらった。プロ野球が全盛の時代だった。テレビでは、連日ジャイアンツの試合が流れていた。親父は大のジャイアンツファンだった。

その頃は、道路でキャッチボールをしていても車の心配をしなくていいような環境だった。何かにつけてのどかだった。

親父の投げる球は、速かった。小学校に上がったばかりの頃、よく取り損ねてしょげていたことを思い出した。少しこちらが上達してくると、カーブなんかを投げてよこす。それもいきなりだった。こっちはやっとの思いで捕球しているのに、変化球など捕れるはずがない。突き指なんてしょっちゅうだった。キャッチボールでは、何故かスパルタな親父だった。今思い出しても、笑ってしまう。

親父は、運動能力に長けていた。その昔、村のマラソン大会で優勝したと親父はよく言っていた。今となっては確かめることはできないが、生前よく自慢をしていた。また、何故だか素潜りも得意だった。海とは無縁の茨城の田舎生まれで、百姓のせがれなのだが。

小学生の頃は、東京湾にある猿島によく連れて行ってもらった。親父は、素潜りで貝を採ってくるのだ。健ちゃんは、とてもそんなことができるわけがないので、岩場で待っている。ところがだ。岩場には一面、フナムシがいるのだ。近づけば逃げるのだが、臆病な健一には、それが怖くて海のそばには近づかなかった。親父が採ってきた貝はその場で焼いて食べる。旨かった。フナムシさえいなければ、最高の場所だった。

定年退職をしてからは、釣りによく出かけて行っていた。神津島あたりによく行っていたようだ。職場の頃の仲間と出かけていた。釣り船がいいのか、腕がいいのかわからないが、いつも大漁で帰ってきた。魚も自分でさばいて刺身にしてくれた。料理もまめにやっていて、器用なところがあった。ただ、定年後は、釣りでもない限り外に出なくなった。完全なひきこもりだ。老人会で出かけていくお袋とはまったく反対だった。お袋は、老人会の役員やサークル活動、手芸など幅広く活動をしていた。ボランティア活動なども積極的に参加していた。今現在も、老人会の会長をやっている。大したお袋だ。

小学校の頃。お袋はＰＴＡの役員をやっていた。姉貴の頃からだから、かなり長い間やっていたのだと思う。よく会合に出て行ったのを覚えている。その頃は、夜に集まることが多かったのだと思う。健一は、そんな夜は不安でやりきれなかった。低学年の頃は、お袋が帰ってくるのが遅いと、布団の中で泣いていたものだ。帰ってきたお袋からは、そんなことで泣くなと叱られ、余計に切なくなったものだ。なんとも情けない話だ。

二〇一二年五月五日。この日は前日までの荒れた空模様を一掃し、朝から快晴だった。早いもので、親父が亡くなって四十九日だ。納骨をするお寺で、法要を行った。田舎の茨城からも数人が来てくれた。遠いところ申し訳ない思いだ。法要はお寺の本堂で執り行われ、かなり荘厳なものだった。よっぽど葬儀屋でやった葬儀より、立派なものとなった。茨城から来てくれた、親父の妹のみつ江おばちゃんも驚いていた。

「おとうさん、喜んでいるわよ、きっと」

我がことのように喜んで、繰り返しそう言っていた。

葬儀屋は、お袋の入っていた互助会の関係でお願いしたものだった。ましてや夜中のこ

とだったので、他に思いつくところもなく、そこに決めたのだった。まあ、不満を挙げればきりがないが、ここのお寺を紹介してくれたことはありがたかった。うちの宗派は曹洞宗だと言うことで、このお寺にきまった。健一は、うちの宗派などはまったく知らなかったので、そんなもんかと思っていただけだった。何度かお寺を訪ねるうちに、大変親切でこちらの側に立って物事を考えてくれるお寺だとわかり、お袋と喜んだものだった。挙句の果てに、お袋もそこのお寺に納骨してくれとのことだった。我が家の単純な思考回路は、受け継がれていくのだな。娘の麻友のお調子者のところは、こんなところにルーツが垣間見られる。まあ、確かに健一にもあてはまるなと、つくづく思った。

法要は何事もなく、おごそかに行われ無事、納骨もすんだ。そのあとの精進落としで、いろいろな話しがでた。来てくれた親戚の者たちは、親父と仲の良かった方ばかりなので、親父の最近の様子などを、いろいろ聞いてきた。取り立てて話すこともなく、はあ、などと健一は生返事を繰り返していた。

言われてみると、ここ数年の親父は、病気との付き合いばかりが思い出される。働いていた定年退職前には、病院などとは無縁の男だった。しかし、そのせいか検査などもあまり行っていなかったような気がする。実際、数年前には動脈瘤が偶然にも発見され、一命を取り留めた。この動脈瘤も二十年～三十年と、かかってできたものだったと言われた。亡くなる二ヶ月前に入院した時も、腎臓がかなり弱っていると言われ、これも積年のものだと言われた。結局、そのおかげで充分な治療ができずに帰らぬ人となった。そういう意味では、医者通いを続けている自分は、そのうち良い事もあるのかもしれないな、などと変に納得したものだった。

親父は、中学を出て薬屋に丁稚奉公にいっていたものだから、中途半端に薬の知識があった。そうは言っても、何十年も前の事、かなり当時とは事情が違う。にもかかわらず、自分で診立てて薬を服用することが多々あった。そんなことも、今から考えれば、命を縮めた要因の一端かもしれない。元来、医者嫌いだったのだろう。

四十九日が終わっても、お袋に母子手帳のことを言いだし損ねている。何故だか触れてはいけない物のように感じられる。これは、健一つまり、自分の考えすぎだとわかってはいるのだが。

麻友の母子手帳を良く見てみると、中学まで使うらしい。予防接種の欄などは、もうすでにいっぱいでどうするのだろう。産まれてから十五歳までの記録が詰まっているのだ。

やはり早く見せてもらうことにしよう。自分の知らない自分の記録が残っているのだから。

幼稚園の時だったかなあ。葡萄狩りか何かで、バスの日帰り旅行に一家で行ったことがあった。帰りの道が大渋滞で、全然進まなくなってしまった。幼稚園児としては、かなり遅い時間になった。たぶん十時か十一時だったのだろう。周りのみんなに、

「健ちゃん、今日中に着けないから、明日は休みだな」

などと言われていた。当人はその気になって、休みだと良いなと思っていた。外は真っ暗だったのを覚えている。幼稚園時代の貴重な記憶だ。バスは十一時過ぎに到着して、幼稚園も休みにならず、クタクタになったというのが結末だった。次の日は眠かったに違いないな。こんな記憶も母子手帳に残っていたら楽しいだろうな。

いわき市に行ってみたい。思いは強くなる一方だ。何があるわけでもないことはわかっている。ただ、そこの土地に立ってみたいのだ。産まれた病院を見てみたい。それだけで良い。何かを期待しているわけではない。いや、どこかで期待しているのだろうか。だとしたら何を？　自分自身でも、わからないことだらけだ。

病院だってもうないかもしれない。住んでいたと思われるあたりは、どうも廃墟となっているらしい。炭鉱あとは、朽ち果てているようだ。それでも行ってみたい。今なら三時間もあれば行けるだろう。ただ、実際の距離や時間よりも、何故だかはるかに遠いところのような気がする。

思い起こせば、親父には心配のかけっぱなしだった。高校を中退すると言った時も、高校くらいは出ておけと、夜間高校の入学願書をもらって来てくれたのも親父だった。普段は、子どもの教育に関しては、お袋に任せて自分では一切なにも言わなかったのに。その時は、おそらくお袋も手に負えなくて親父に相談したのだろう。そのおかげで今がある。高校の途中で、一人暮らしをすると言った時も、お袋は反対だったが、親父は引っ越しを手伝ってくれた。その夜間高校を卒業した時にも、大学へ行きたいと頭を下げた時、

「行きたいのならば、行って来い」

と言ってくれた。好き勝手ばかりやっていた息子を、静かに見守ってくれていた。今、自分自身が親になり、子どもに接する時、親父のような態度がとれるだろうか？　おそらくできないだろう。

晩年では、仕事につまずき、うつ病になった息子の事を心配して、自分自身の健康の事を後回しにしていた親父。亡くなるまで心配をかけてしまった。いや、亡くなった後も、あの世で馬鹿なせがれを憂いていることだろう。

生まれ故郷に行ってみたい。その思いだけが強くなっていく。いつか必ず産まれた土地に立ってみたい。そして、健吾と芳枝の間に、健一が産まれたのだという、ある種の実感を感じ取りたい。いつの頃も、親父とお袋に支えられてきた健一は、確かにこの世の中に存在したのだと、いわきの大地をこの足で踏みしめたい。ただ、それだけなんだ。